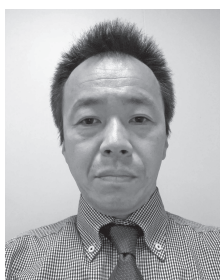


—大学動物病院の活動の現状とさらなる発展を目指して (X)—

## 鹿兒島大学共同獣医学部附属動物病院の取組みと課題

藤木 誠<sup>†</sup> (鹿兒島大学共同獣医学部附属動物病院病院長)

## 1 はじめに

これまで獣医科大学の附属動物病院は、獣医療を提供することに加え獣医師の育成に必要とされる臨床実習を行う施設として役割を担ってきた。参加型臨床実習の実現のためにモデル・コア・カリキュラムが定められ、さらに

VetCBT 及び VetOSCE で構成される共用試験による Student Doctor の認定により参加型臨床実習を行う学生の質的担保が図られるようになった。しかし、欧米で行われているような1学年全員に対する臨床教育の充実と実質化においては課題を残していると考えられる。

鹿兒島大学においても同様の課題を抱えており、農学部獣医学科までは4年時から卒業論文のために研究室所属を行っていたことから、臨床系、非臨床系研究室に所属する学生間に大きな格差が生じていた。本来、獣医師免許に与えられている権利、義務においては全ての有資格者で同じであることから、卒業後の進路に関わらず学部教育は全ての学生に齊一的に行われるべきであるが、臨床実習に関しては卒業時における学生の手技の習得度がさまざまであり、一定の基準により評価することができていなかった。本稿では、共用試験に基づく参加型臨床実習の実施と国際水準を目指したヨーロッパ教育水準 (EAEVE) 認証取得における鹿兒島大学附属動物病院での取組みについて述べてみたい。

## 2 診療及び教育体制の整備

鹿兒島大学では、地域の1次及び2次診療施設として臨床的な機能を果たしていたが2000年代に入ると予約診療を中心とした2次診療施設として充実を図り、完全予約制へと移行し現在に至る。この約20年間に診療と実習を担当する教員は伴侶動物、産業動物を含め8名から20名へと徐々に増員された。特に病院専任教員、特任教員の人事が整備されたことが大きく関係している。また、動物看護師をはじめとする技術サポートスタッフ

が13名まで整備されたことは診療業務だけでなく参加型臨床実習を行う上では非常に大きな変化であったと言える。

一方、施設面の変化としては、2度の改修を経て小動物診療センター (図1) の新築と旧動物病院の改修により病理解剖室と大動物診療センター (図2) の整備が行われ、平成20年には獣医系大学には珍しい軽種馬診療センターが設置されている (図3)。これらの3つの施



図1 小動物診療センター



図2 大動物診療センターと病理解剖施設

<sup>†</sup> 連絡責任者: 藤木 誠 (鹿兒島大学共同獣医学部附属動物病院)

〒890-0065 鹿兒島市郡元1-21-24 ☎・FAX 099-285-8732 E-mail: makotofjk@vet.kagoshima-u.ac.jp



図3 軽種馬診療センター

設備整備により臨床実習を行う環境は格段に改善された。特に平成29年の小動物診療センター新築ではEAEVE認証を満たすために1学年全体に対する臨床実習の実施と各セキュリティに対応した構造にしたことにより、各部屋において十分なスペースが確保され、動線の整理とそれに対する従事者の認識が得られたことも、単に国際認証を得るだけでなく、その建物や部屋の配置の意味についても認識されたと感じている(図4, 5)。

大学側のさまざまな都合で設計されていた施設から国際的基準に基づいた意味を持つ施設で診療活動と実習を行うことになり、その構造的な意味や動線を理解する上でもこれまでにできなかった教育効果が期待できると考える。また、CT、3TMRIなどの画像診断装置の整備により、それまで地域から求められていた画像診断部門の充実が特徴となっている。これらのハード面においては、平成24年からスタートした山口大学との共同獣医学部にかかる事業により整備が始まり、平成25年からはEAEVE認証を目指した事業を経て現在に至る。このように参加型臨床実習の充実のためには、附属動物病院単独での整備では困難であり、学部または大学全体での取組みが不可欠である。

EAEVE認証を満たした参加型臨床実習を実施するための教育体制において、獣医師及びサポートスタッフの充実は不可欠であった。農学部獣医学科時代の平成28年までの実習との違いとして、実習対象となる学生数の違いが明らかであり、平成29年より前臨床実習(内科実習、外科実習、繁殖学実習など)と同様に1学年全体がローテーションによる実習を開始し、令和元年のEAEVE認証取得を経て現在まで修正を繰り返しながら体制作りを行っている。現時点では、伴侶動物コース、産業動物コース、病理コースに大別して約30~32名の学生に対して合計38週/年でのカリキュラムとしており、これらに関連するスタッフ(動物病院専任、学部との兼任を含む)は、合計47名(獣医師25名、看護師



図4 処置スペース。参加型臨床実習に対応できるように広いスペースが確保された。



図5 手術準備スペース。麻酔の導入エリアとして3台の麻酔器を配置できる。ここから各手術室へ移動していく。

14名、専門技術職員及び事務職員8名)体制で行っている。しかしながら、診療活動と並行して参加型臨床実習を十分に実践できる体制としては十分とは言えず、実習担当をローテーションで対応できるような体制が臨床教員にとっても専念しやすい環境と言えるかもしれない。

大学の正規教員はポイント制で管理されており、そのポイントの範囲内での増員が可能であるが、一般的にそのポイントはすでに最大限に活用されているために教員の純増は非常に困難であるのが実情である。したがっ



て、病院の人事計画としては診療報酬や外部資金を人件費の財源として教員やサポートスタッフの増員を図ることが必須となる。

本学附属動物病院では現在、独立採算制による運営を行っており、前年度の収入実績が次年度の予算となることから、診療収入増により病院専任教員及びスタッフの雇用が可能になっている。そのために、地域獣医師向けの卒後教育セミナーや自治体の愛護施設との協定事業などを通じての交流や、また、EAEVE 認証における整備事業の一環として、平成 28 年より夜間診療体制の整備を開始し、平成 29 年からは、平日の 19 時～翌朝 6 時までの救急患者に対応している。

また、産業動物に関しては、通常の診療体制に加えて大隈産業動物診療研修センターを設置し大隅半島での活動拠点を整備した。このように地域の要望に対応しながら紹介症例の増加を目指している。以上のようにさまざまな取組みを行いながら病院の自主財源から獣医師を採用し、参加型臨床実習と診療科の機能強化を図ることで専門診療体制の充実を目指している。

### 3 EAEVE 認証と参加型臨床実習の実現に向けての取り組み

これまで、附属動物病院が学生に対する総合的な臨床実習を提供する教育施設として十分な発展を遂げることができおらず少数の教員個々の努力に依存してきた。中には狭い専門領域で国際的レベルに達しているが、包括的な臨床実習を求められる教育施設としては、欧米と比較して大きく見劣りする状態が長く続き、特に非臨床系研究室で卒業論文を作成している学生にとっては、附属動物病院における臨床教育は見学程度に留まっていた。そして、臨床獣医師としてのトレーニングは、就職した施設に依存したままであった。

獣医学教育の充実・改善において、社会の要求に応えうる実践的な獣医師の養成のために参加型臨床実習の実質的な実施が必要となり、獣医学においても参加型臨床実習を行う学生の質の確保として、平成 29 年から共用試験が実施されるようになった。そして、かつ国際水準を満たすには、参加型臨床実習において学生が卒業までに習得すべき技能や知識を明確にし、その到達度を評価する仕組みを構築する必要があった。欧米では、Day One competencies (または Day One skills) と呼ばれている到達目標が示されており、EAEVE 認証を目指すわれわれとしては、これに相応する鹿児島大学版 Day One competencies の策定を行った。この「Day One competencies」とは、安全で確実な獣医療を提供するための卒業時点の最低限の技能、知識のことである。これは単に卒業時での知識だけではなく、技能も含めて定められている。鹿児島大学では、学生が実際の診療活動

の中でクリアすべき項目をリスト化したものを Day One sheet とし、学生が実習を通じて求められている到達目標をハンズオントレーニングで習得していくことを重視した (図 6～8)。かつ、学生全員が積極的に参加する実習体制を目指し、現在も修正を繰り返しながら確立を目指している。

しかし、学生のほとんどが臨床分野へ進む欧米と異なる背景を持つわが国では、臨床分野以外への進路を希望している学生に対する対応も継続的に検討しなければならない課題である。さらに、動物病院における臨床実習がはじまるまでの全ての前臨床実習 (基礎、病態、臨床の全て) についても、参加型臨床実習の前段としての実習として捉え、先に述べた Day One competencies を意識した実習内容を統合的に実施するよう組み替える必要があると考える。

現行の共用試験は参加型臨床実習開始前の学生の評価を目的としており、実習終了後の習得後の評価として「Day One competencies」に基づく評価が卒業時の全ての学生に対する評価になる。次の段階として、Advance コースの整備と充実を図ることも必要と考える。

かつて臨床系に所属する学生や将来的に臨床分野に進むことを望んでいる学生は、単位認定と関係なく附属動物病院での補助的役割に多くの時間を費やした。これによりスキルの習得がなされたことは事実である。このようにさらなる研修を望む学生に対して、全学生に対して求める「Day One competencies」と別に Advanced Day One competencies のようなカリキュラムの整備も重要と考える。

獣医学教育の内容は明らかに高くなったことが感じられるが、座学中心であり Day One competencies を中心にした基本的な臨床技能を確実に教育する必要がある。令和元年に EAEVE 認証を取得し、国際水準の獣医学教育を確立するための第一歩を踏み出したことにより、附属動物病院は、実質上、必須の重要施設となり、高い教育効果を生む実習を実現するための努力を続けていかななくてはならない。つまり、附属動物病院は単に臨床実習施設として設置すればよいのではなく、質、量ともに意義ある参加型臨床実習を実施するための環境を有する診療施設でなければならないことが明確になった。

教育効果の高い参加型臨床実習を実現するためには豊富な臨床例が必要である。しかし、高度獣医療を担う機関である大学の動物病院においては、診療内容に偏りが生じてしまう。大学附属動物病院をはじめとして二次診療施設で学生の臨床教育を行う場合、一次診療の経験不足が指摘される。鹿児島大学では「夜間診療実習」と保護動物を対象にした「シェルター実習」を参加型臨床実習の 1 つのコースとして実施している (図 9)。ここでは一次診療症例を経験する以外に、夜間診療実習では地

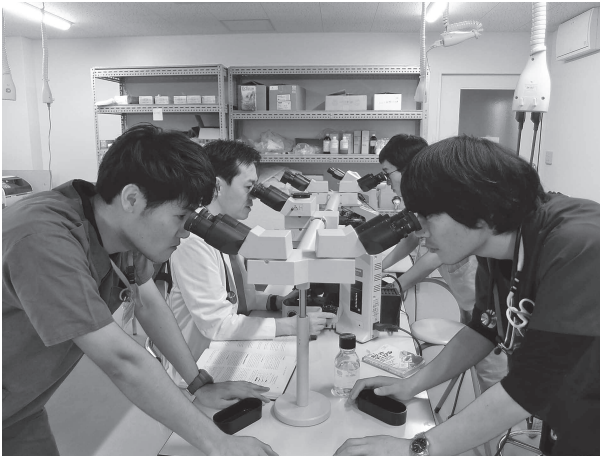


図6 臨床病理検査に関する実習. ディスカッション顕微鏡を用いた実習の様子.

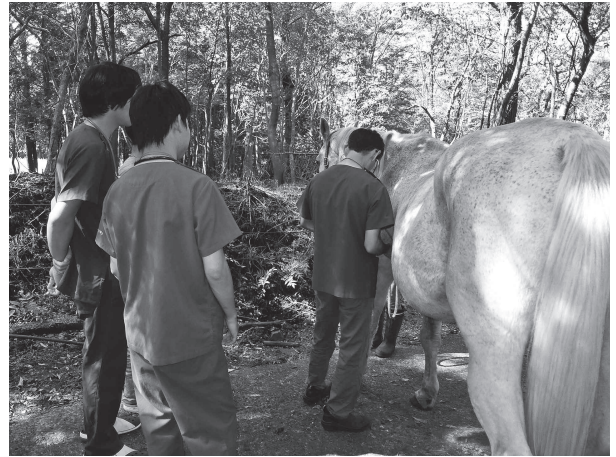


図8 馬の診療実習



図7 手術への参加



図9 シェルター実習

域の動物病院との連携を伴うことから、症例を紹介しやすくすることも期待される。

またシェルター実習では自治体との連携により一次診療の経験を得ながら動物福祉への貢献を経験することも目的としている。包括的でバランスが取れた臨床教育を実施するためには、まだまださまざまな取組みを介して実習内容を補完するシステムの構築が必要となり、鹿児島大学でも模索を続けていかなければならないと考える。

#### 4 最 後 に

日本は獣医師の職域が広く、欧米のように「獣医学教育」と「臨床教育」を同等に扱うことは困難であるが、

国際水準である EAEVE 認証を取得するにあたり、将来的には日本版「Day one competencies」を策定する必要性を感じた。しかしながら、体制を整備していく過程において重要なことは、学部すべての教員が獣医学教育の改善・充実に向けたこれまでの取組みを熟知し、十分に理解したうえで、その必要性和意義を学生にわかりやすく繰り返し説明することである。すなわち、獣医学教育改革は教員並びに学生双方の意識改革でもある。そして、その取組みを進めていくにあたり附属動物病院は新しいアイデアのもとに独立した施設として機能していく必要がある。